

った時、心の平安を失ったのです。

寄宿舎に帰り、一人静かに神のみにひざまずき「神様ということなのでしょう。あなた様のみ旨ではなかったのでしょうか」と祈りました。

その時主は「深い溝に落ちてごらんさい。だれも見向きもしない深い溝に！ そこにこそわたしがあなたのそば近くにいます」と私の心の奥深くに語られたのです。当の本人である三橋さんですが、私があまりにも多くの人々に反対されるのを見てかわいそうに思い、この結婚はやめにしようと言ったのですが、それ以来私の決心は再び動かされることはありませんでした。これが結婚へのスタートだったのです。



クササンダンカ

聖書学院への入学は以前からの願いでした。それが日本語教師をしている間に、生徒だった宣教師の紹介で実現したのでした。私の気持ちの中には、聖書に対する正しい知識を持つことはもちろん必要なことですが、聖書のみことばに従ったみことばに生きる信仰生活を送りたいという願いがあったのです。それには、聖書学院のようなところで、実際の指導の下に信仰の訓練を受ける必要があると感じていました。

昭和三十一年（一九五六年）四月、二人が結婚してちょうど一年後に、長野県の軽井沢聖書学院に入学しました。当時、私は入信してから七年目、妻はまだ二年と数か月しか経っていません。入学前からたいへん厳しい学院であるとは聞いていたのですが、いざ入学してみると、聞きしに勝る厳しさに驚いたものです。

入学してから一週間ほど過ぎたある日、私は院長に呼ばれて、「あなたはここの生徒ですから、他の生徒と同じようにクラスの後で作業をして下さい」と、学院に来た質問の手紙に対して返事を書く仕事を与えられました。実を言えば、私は書くことが一番苦手でした。普通に動

くかのように見える私の唯一の左手ですが、肩が普通でなく、腕も普通のように上下左右には動かせず、そのうえ、少しだけですけれど手首が絶えず震えているのです。ですから文字を書く時には体を緊張させ、神経を使いながら書くのでとても疲れますし、時間も長くかかります。そんなわけで、読むことはできても、書くことはあまりしていなかったのです。

学院に来た手紙の返事を書くことになって初めての作業の日、自分なりに精一杯書きました。この返事をもらう人は、書いた者が不自由な左手で書いたかどうか知らないのだから、これはまずい字だなどと思われたら学院の恥になると思いながら、一字一字注意深く書いたのです。やがて院長が来ました。

「兄弟、何通書きましたか。」

「はい、一通書きました。」

「たった一通ですか。こんなに長い時間かけてたった一通しか書けなかったんですか。」

「はい、上手に書くこうと思いましたが。」

みるみる院長の顔色が変わりました。長い時間でたった一通しか書かなかったことと、上手に書くこうと思ったことがいけなかったのです。

「上手に書くこうというのは、それはあなたのプライドです。あなたは今まで身体障害者として甘えてきたかもしれないが、ここでは一生徒です」と、さんざんしかられたのでした。

長い時間かかったことは確かです。それも学院のことを考えたからですし、身体障害者だからといって決して甘えてはいけなさと自分を戒めていただけに、院長のこのことはとても悲しいものでした。入学してわずか一週間でこのようなことにはぶつかり、これから先どんなことが起こるだろうか、果たして自分は耐えられるだろうか、大きなショックと不安を覚えたものです。けれども、これで挫折したら、信仰の訓練を願って入学した本来の目的も全うされないし、それにも増して、ここまで導いて下さった主に対する裏切り者になるのだと、落胆しそうな自分の気持ちを励ましたものです。

入学して一か月後、妻が体調が思わしくないと訴え始めました。環境が変わったせいだろうと言っているうちに、だんだんと食欲がなくなってきた、吐くようになりました。これはつわりというものだ！ 妻が妊娠していると知ってまず脳裏に浮かんだのは、学院生活が続けられるか、その次に、出産のための費用はどこから、という二点でした。ことに学院生活において、何事によらず人手を借りなければならぬ自分は、これからだんだん妻の体が自由にならなくなるにつれ、学院の皆さんにいろいろな点でめんどうをかけることになるでしょう。せっかく将来主の働き人として立つに必要な訓練を受けたいと長い間祈ってきた入学できた学院だけれども、このような事情になれば退学になるかもしれないと思うと、心が乱れていくばかりでした。

もし学院に残るとしても、これからの多くの困難を予想する時、それらにどのように対応したらよいのかと、「主よ、この者をあわれんで下さい」と祈るのみでした。幸いにも院長からは「あなたは主の導きによってこの学院に入学したのだから、生徒として残って勉強しなさい」と励まされました。入学一か月後からこんな調子での学院生活でした。

妻は、だんだんつわりがひどくなる一方で、食欲はなく、吐く回数も多くなりました。吐く時の音と、姿を見ていると、本当に身の縮まる思いがしました。こんなに苦しんでいる妻の様子を見て、「君はこれでも生まれてくる子供を愛せるだろうか」と言っただけです。昔から「産みの苦しみ」と言われていますが、母親にとっては出産の時だけでなく、身ごもった時から苦しみが始まるということが実感としてわかった日々でした。

大きな苦しみを通して一つの生命が誕生するのだと知った時、自分が救われて神の子として誕生するには、主イエス・キリストの十字架がどれほどの苦しみと犠牲であったかをさらにもう一度深く考えさせられ、その救いの恵みをほめたたえたものでした。

日増しにやせ細り、衰弱していく妻に、何か食欲の出るような食べ物はないだろうか、学院の生徒にリヤカーを引いてもらって、軽井沢の旧道まで買い物にも出かけました。どんな物を買ったらよいやら全然見当が付きません。青森で生まれ育ったのだから青森の雰囲気でないかと思う、「いわしの目刺し」と果物を少し買って帰りました。この「いわしの目刺し」がバ

ッチリで、その日は久しぶりに食欲が出て食べてくれました。「やった！」何か大きな事業でも完成したような良い気分になりました。

次に買い物に行く時は、もう前のような苦勞はせず、「いわしの目刺し」に絞り、しかもたくさん食べさせようと、どっさり買い込みました。ところが妻はその目刺しを、今度は「見ただけでも吐きたくなる」と言うのです。こちらが泣きくなりました。

このようなことを何回か経験しているうちに、一度にたくさんは食べられない、何度も同じものは食べられない、空腹にさせない、話し合いながら楽しくゆっくり食べるなどのことがだんだんわかってきました。

愛の一つの面は、相手の立場に立ってあげることだと信じています。つわりのために苦しんでいる妻を身の切られるような思いで見ているうちに、その人の身になってあげるとはどういうことなのかを、幾分でも味わったような気がします。

主イエス・キリストが十字架上で「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と、罪人の立場を弁護して下さり、さらに罪人の立場にご自身を置かれて身代わりの死を味わわれたことこそ、愛以外の何ものでもなかったと教えられたのです。

身重の体であるといつても生徒である以上は、勉強も作業もみんなと一緒にするのは当然の

ことです。勉強の方はさておいても、作業の方はだんだん大きくなっていくおなかを抱えてのことだけに、妻にとってはたいへん苦勞なことでした。物を積んだ荷車を引っ張ったり、助産婦からは「足を冷たい水の中に入れてはいけない」と言われているのに、お風呂の掃除をしたり、池の中に入ってパセリ取りもするのです。

さらに、鶏の世話をする係でもありましたので、暗くなって鶏の目が見えなくなる前にえさをやらなければと、自由がきかなくなってきた体で走り回ることもありました。手伝ってやれない私にとって、そんな姿を見ることは非常につらいことでした。それでもある時などは、日が暮れる前になんとか少しでも早くえさをやらなければと焦りながら準備をしている妻を見かねて、まな板の上に置かれているパセリを手で押さえる代わりに足で押さえ、動く方の左手に包丁を握ってパセリをきざんで手伝ってやるという芸当をしたこともあります。

本来ならば夫として、また男としてもしてやらなければならぬことが多くあるはずであり、まして妊娠している妻にはなおさらのことなのに、それができない自分の心境はつらいものでした。

「妻の身を案ずる我に術すべもなし

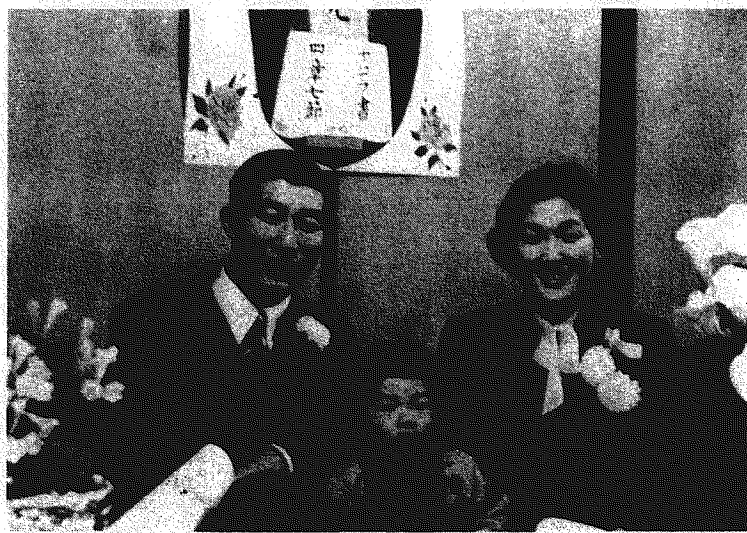
祈らんとせど涙のみ出づ」

聖書学院の生活は学びと訓練との場であるだけに、厳しい様々な経験を通されます。四畳半

のガレージ小屋での生活。一日に二時間の自由時間ではとてもやりきれないたくさんの宿題。服従することの徹底（指導する者に従えない者は、最高の権威者である神に従う者になれない）等々。今にして思えば、よく耐えられたものだ、主のみ助けに深く感謝するばかりです。

他の人から見たならば無茶苦茶に思えるような学院生活の中で長男が誕生しました。零下二〇度前後の軽井沢の一月でした。この子の出産に当たっては、その費用と手伝い人のために私は断食して祈りました。主は見事に祈りに答えて下さり、生まれる数時間前に遠くの地から一人の姉妹を遣わして下さいました。また、出産扶助を受けるよう親切に勧めて下さる助産婦さんに、「私共は真の神様にのみ頼っていますので」とお断りしたのですが、主は頼る者を辱しめることはなさらず、出産に必要な費用の全部を名も知らない人を通して満たして下さいました。

私共は、長男をイスラエルの預言者にちなんで恵理哉と名づけました。預言者エリヤは偶像に仕える者たちの中でただ一人、真の神に仕える者として「私が仕えている万軍の主は生きておられます」という素晴らしい証しを立てました。わが子も、偶像のあふれているこの日本で、真の神にのみ仕える者であってほしいという願いと、経済力のない親を持つこの子が、あのエリヤをからすを用いて神様が養われたように神様によって養われるようにという期待を込めてのことでした。



軽井沢聖書学院卒業式（1959年）

このように聖書学院に入学してから一年間は、慣れない学院での厳しい生徒としての生活、妻の妊娠、長男の誕生、それに伴う経済のことなどで本当にたいへんでした。

「神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません」というおことばに「アーメン」と言うほかありません。

神様は軽井沢聖書学院を通して実に貴重な学びと訓練を与えて下さいました。学院の生徒として二年目になって、私は二つのことに気づかされました。それは、何事に対しても「はい」と言う従順さと、弁解をしないで「ごめんなさい」と言うへりくだりの二点でした。この学院で要求されているのはこのことなんだと気づかされたその時から、学院で

の生活は以前のように苦痛ではなくなったのです。院長も、私がそのことに気づいたと知ったのでしょいか、あまり厳しくなくなり、いろいろと学院の実情を知らせたり、時には相談までしてくるようになりました。

二つのことに気づくまでには、ただ厳しい院長としか思えませんでした。学院を愛し、生徒を愛し、何よりも主を愛している人なんだ、それが時には問題を起こすことにもなったのだと理解できるようになったのです。

私にとって学院は素晴らしい学舎^{まなびや}でした。厳しかった院長も、この世における私の良き恩師でした。今日、一伝道者、一牧会者として尊いご用にあずかせていただいている者にとつて、従順とへりくだりがどれほど必要で大切であるかを知れば知るほど、学院での体験に対して深く感謝するのです。

海外に国内にと福音宣教に出かけつつ、二百名ほどの教会を牧会している自分の姿を、今は天に召されている院長に見てほしかったし、教会にも来ていただいてあの厳しいメッセージをしてほしかったと悔やまれてなりません。

主にゆだねて函館へ

昭和三十四年（一九五九年）三月。私共夫婦にとっては、厳しかったの一言に尽きる学院での生徒としての生活を終える時が来ました。それはそれは長い三年間でした。よくも耐えられたものだ、今さらながら自分でも感心するくらいです。もし、今もう一度あの経験を繰り返してごらんと言われたら、まったく自信がありません。本当に主のあわれみと恵みによってのみ支えられた三年間でした。

卒業式の当日、青森から姉の主人と、信仰へのきつかけをつくってくれたU君がわざわざ出席してくれました。院長のメッセージも終わって、「卒業生に祝福のことばをかけてやって下さい」という司会者の勧めに、真っ先に席を立てて私の所に来てくれたのがU君でした。人前に出ることを非常に恥ずかしがる彼が、私の左手を両手でしっかりと握り締めて「よくがんばったなあ」と目に涙を浮かべながら祝福してくれた時、男の友情の絆の固さをしみじみと感じさせられて、自分もまた涙の流れ出るのを止めることができませんでした。思い返せば、一冊の聖書を貸してくれたことから始まって、リヤカーでの教会通い、そして今日の卒業式と、彼

とのかかわり合いが私に及ぼした影響はどんなに大きいものであったことでしょうか。

学院卒業後の一年間は、職員としてクラスの授業を担当し、さらに中軽井沢の伝道牧会の責任をも与えられました。院長は私共のために住まいの建築まで考えてくれました。あちこちと出て歩くのに不自由な私が、学院にいながら主にご奉仕できるようにという院長の思いやりでもあったのです。住居も新築され、経済的なものも職員として保障されるなら、私共夫婦にとって結婚以来の最高の安定した生活となるわけです。けれども、なぜかそのことに対して平安がありませんでした。

確かに私共にとって好都合のように見えるのですが、自分は一伝道者として出ていくのが本来の生き方であって、この地には留まるべきではないという思いが強くなる一方だったのです。聖書学院への入学も、この伝道者としてのビジョンへの備えでもあったはずでした。

ちょうどそのようなことで思い悩んでいた時でした。青森時代に親しくしていた宣教師が北海道函館で開拓伝道を開始することを耳にしました。そして同労者が与えられることを祈っていることも知りました。私はこの宣教師に函館での同労者が与えられるように祈りながらも、自分については、雪の降らない寒くない所へ行きたいと祈っていたのです。私の体に寒さは非常にこたえるし、雪が降り始めると何を利用するにしても外出は不便になるからです。思う存分に伝道するには、寒い雪国でなく暖かい地方でと祈るのですが、主は私の心に、どうして

も北海道へという重荷を与えられたのです。打ち消しても打ち消しても北海道への重荷は取り除かれません。これは主から出たものと認めつつも、いざ北海道行きを実行するとなると、これから先の実際的なことを考えてしまい、不信仰な思いで心は乱れるのです。

これから未知の世界である北海道で親子三人どうなるのだろうか。一人も知人もいない所で、どこに住むのだろうか。これからの自分たちの生活を、いったいだれがサポートしてくれるのだろうか。軽井沢から北海道までの運賃やその他の費用はどうやって……。

次から次へと不安材料が浮かんできてる中で、ただ主イエス・キリストの導きを祈るのみでした。

ちょうどそんな時、私は一冊の本を手にしたのです。それはあの中国奥地伝道団の創設者であるハドソン・テラーの手記でした。

その手記にはハドソン・テラーが中国大陸に重荷を与えられて出かける時の事情が書かれていました。彼にはサポートをしてもらえるあてはまったくありませんでした。ただ信仰によって、そして主が弟子たちを遣わす時に言われた「旅のためには、杖一本のほかは、何も持たずで行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻きに金も持って行つてはいけません」ということばがあるだけでした。この計画を知った経験豊かな老教師は、その無謀さに驚きあきれてこう言ったそうです。

「そのおことは、イエス様の時代ならいざ知らず、今の時代では……。あなたは経験もなくまだ若い。もう少し年を取ったら賢くなるでしょう」と。

しかしハドソン・テラーは「私はあれから年を取ったけれども、あの時と同じで賢くはならなかった」と述べているのです。

私はこの手記を通して、イエス・キリストは昨日も今日も、いつまでも変わることのない方であることを、さらに深く知らされ、北海道行きの大胆な信仰に立たせていただきました。学院を辞することも、何のトラブルもなく認めてもらうことができました。

院長が反対するのではないかと内心気にかけていたのですが、主がそのように導いておられるのならば、問題にすることなく受け入れて下さったことを、今でも感謝しています。皆さんから頂いた餞別で、引越しのためのすべての費用もまかなうことができました。

いよいよ出発

昭和三十五年（一九六〇年）五月。生涯決して忘れられないであろう厳しい四年間を過ごした軽井沢を離れる日がやって来ました。軽井沢駅には、学院に係のある人々のほかに、個人的に交わらせていただいた方々も見送りに来て下さいました。その中には作家正宗白鳥の奥さ

んもいました。彼女は子供のように純粋な信仰の持ち主で、婦人会や子供の集会などと一緒にさせていただいたものでした。びっくりしたことは、駅弁売りのおじさんたちまでが「軽井沢から行かれるんですか」と、見送りの人々の列の中に加わってくれたことです。

伝道に出かける際に、妻に背負われて軽井沢の駅から電車に乗り降りしている姿を見て心にかけていて下さったのでしょうか。クリスチャンは、いつでも何を見られているかわからないキリストの証し人なのだと、身の引き締まる思いでこの見送りを受けたのでした。

聖書学院の職員と生徒たちによって結成されたバンドが演奏する「いつくしみ深き友なるイエスは」と、「神共にいまして」のメロディーの中を列車は軽井沢の駅から動き出しました。本当に感無量でした。私共夫婦が、涙と祈りで四年間過ごした軽井沢。私共を主の兵士として訓練してくれた軽井沢です。また私共夫婦にとっては、長男誕生の地なのです。これから北海道でどのような事態が私共を待ち受けているか、まったくわかりませんが、ただ主の導きのみにゆだねて目指す北海道へと出発したのです。

北海道の玄関ともいわれる函館の地での生活は、二階の十畳一間で始まりました。これという家具もなく、妻が包装紙を張って少しは見栄えを良くしたリング箱を、食器棚の代わりに積み重ねて使いました。食事用のテーブルも、一枚のベニヤ板にテーブル用の脚を買ってきて取りつけたものです。

こんな部屋で行われた聖書研究会に出席したある女子学生は、「この家の主人は、体が不自由なだけでなく、頭まで変じゃないだろうか」と思ったそうです。部屋の中を見回しても家具らしい家具はなくて貧しそうなのに、感謝だの救いだの、永遠のいのちとか天国とか、さっぱりわからないことを話している変な人だと、家に帰ってから話していたのだそうです。やがてこの家族の中から数人のクリスチャンが出たのは主のなさった素晴らしいみわざでした。

雪国東北で生まれ育った私でしたが、さすが北海道の冬は厳しく、風もまた身にこたえました。ことに車椅子に乗って路傍伝道をする時などは、だらりと下がっている両足が骨まで凍っていきような気がしました。福音を語っている口までが、寒風のためにだんだん動きが鈍くなって非常に話にくかったものです。

雪道の運転に慣れていない妻にとっては、当時の古い軽四輪の自動車を運転するのはたいへんなことでした。走っている途中で急にスリップして車が一八〇度回転したり、赤信号でブレーキを掛けても止まらずに交差点の中に入ってしまったりで、何度危険な目に会ったかしれません。

私共夫婦は車に乗ったらず、「私共を事故から守って下さい。自分の過ちからも、相手の過ちからも。クリスチャンとして、主のみ名に恥を与えるようなことがありませんように」と祈って出かけています。主が共にいて下さることは最善の保護です。

妻が運転し、その助手席に乗っている私は幸せな気分浸ってばかりいられない時もあるのです。車がスリップして雪やぶに突っ込んで動けなくなった時に、妻がシャベルで雪をかき出している様子を見て手伝いに来てくれた人が、助手席に乗っている私を見て、いかにもしゃくにさわったようにして、「この男はなんだー」と言うことがよくあります。その時のつらさは、その身になった者でなければわかってもらえないかもしれません。車で買い物に出かける時もそうです。多くの物を買って込んで、両手いっぱい抱えて車に戻ってくる妻の姿を見つけると、私はためき寝入りをします。助手席にどっかと座って何も手伝おうとしない私を、だれかが見ていたら、なんと不人情な男だと思うだろうと考えるからです。

次男誕生

函館に移って一年と少し経って、再び妻が身ごもりました。以前と同じようにつわりもひどいものでしたが、学院入学時のように、これからやるぞと意気込んでいただけに、受けたショックは大きいものでした。それは、子供が嫌だというのではなく、妻の産前産後の期間、どうしても伝道活動にブレーキが掛かるからでした。妻と一体でなければ何一つできない自分にとって、大きな痛手とさえ感じました。

軽井沢の時にもこの函館でも、いざ本番という張り切っている時にどうして主はこのようになさるのだろうか……。そんなつぶやきを感じていた時思い浮かんできたのが、旧約聖書の人物モーセとヨセフのことでした。モーセが実際にイスラエル民族を引き連れてエジプトを出るまでには、エジプトで学術を身につけるのに四十年間、ミデヤンの地で牧者としての経験が四十年間、合計して八十年という整えられるべき長い期間があったのでした。またヨセフにしても、自分の将来に対する神からの啓示を受けてからその実現までには、十数年間様々なところを通る必要があったのです。しかもそれは、神の約束とはまるで反対方向に行くような、信仰と忍耐を必要とするつらい期間でした。

一人の人間が神のご計画通りに用いられるまでには一朝一夕でなるものではないし、人は生まれつきのままでは決して神のお役に立つことなどはできないのだと知らされたのです。

一人では外に出られず、そのうえ何をするにも妻の手を必要としている自分にとって、妻が身重の間は忍耐と祈りの中に時を待つことを学ばされる期間となりました。とかく、思いついたらすぐにやってのけたい自分にとって、この期間というのは神が与えて下さった貴重なレッスンでした。神は、その人その人に最もふさわしいことをなさっておられるのであって、決して意地悪をしておられるのではないのです。

産み月も近くなってきたある日、年配のクリスチャンの方が言いました。

函館港をバックに（一九六一年）



「奥さんは女の赤ちゃんですよ。だって穏やかな顔をしているから。きっと女の子です。」

そんなにまでおっしゃるなら女の子かなと思った私は、女の子の名前だけを考えていました。かわいらしくて可憐な名前をと思い、「野百合」とか「小百合」とか、聖書の「シオンの娘」から「紫音」はどうだろうかなどと……。

けれども、今日か明日かと出産が迫ってきた時、ひよっとしたらと思って男の子の名前も考えておきました。ユダの十六代の王ヨシヤから「与志哉」はどうかと思っていました。そのことがよかったです。人の思いと神の思いは異なると言われる通り、結局生まれたのは男の子だったからです。後でわか

ったことですが、私の血液型がRHマイナス型で、もし女の子が生まれたらその赤ちゃんの血液を交換してしまわなければならなかったそうです。やはり神はすべてを「存じて一番よいことをなさると、つくづく思ったものです。私共の函館での福音宣教の戦いは、このようなところから始まりました。

函館でも相変わらず困難といえば、結婚以来続いている経済的な事柄です。決まったサポートもない私共にとつて、親子四人が生活していくのは容易なことではありません。自分と妻に關しては、覚悟の上で選んだ道ですから喜んで耐えられるとしても、幼い二人の子供たちのことを思うにつけ、これでよいのだろうかと迷うのでした。親の心情として、子供たちにはひもじい思いをさせたくないという気持ちにかられてどうしようもなかったものです。そのうち内職でもできればと、いろいろな仕事について思いを巡らすようになりました。

このように子供のことで心が占領されてしまっていた私に、主は語りかけられました。「何のために北海道に移ってきたのか、福音宣教の働きのためではなかったのか、子供への情のために本来の目的を見失ってはならない。」

もちろん、責任ある親の立場として子供のことはどうでもよいなどというわけではありません。しかししみことばに、「わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」とあるように、主イエス・キリストに従う生活はいい加減なものではありません。

確かに生きておられる神様は、今まで多くの困難の中で私共を支えて下さったように、これからも支えて下さるはずだと信じました。それまでの不信仰を悔い改めてどこまでも従う信仰に立ったのでした。

ところがその翌日、驚くべきことが起こりました。差出し人の住所も名前も書かれていない一通の手紙が届き、なんと中に一枚の千円紙幣が入っていたのです。それと一緒に聖書の箇所を書いた二枚の紙片も同封されていました。

「勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいると、万軍の主は言われる」(ハガイ二・四協会訳)。

「わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」(ハガイ二・一九協会訳)。

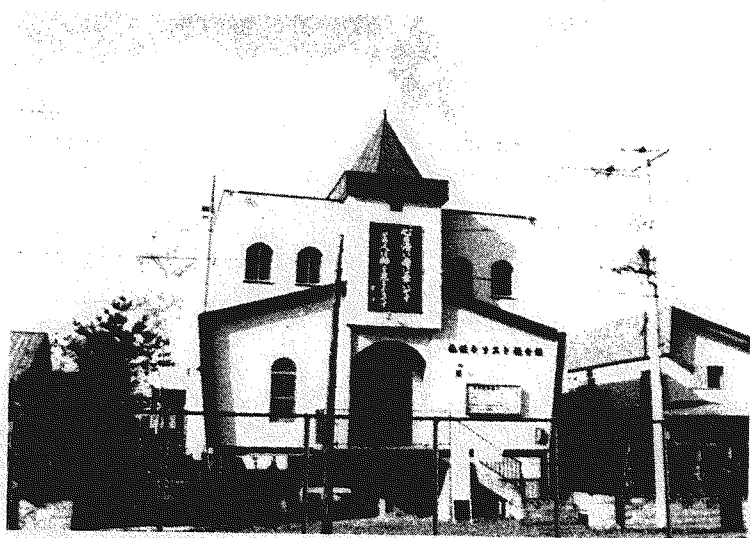
それは当時の私の心境にどれほどびつたり励ましのおことばだったでしょうか。まるでだれかが私共の状況や心境を知って送ってくれたように、誠にグッド・タイミングだったので。神様はなんと時になった素晴らしいことをなさるお方でしょう。あの預言者エリヤではないけれども、「私の仕えている万軍の主は生きておられます」。まさにその通りです。

札幌キリスト福音館

とても長く感じられた函館での五年間の生活にピリオドを打って次の伝道地札幌に移ったのが昭和四十年（一九六五年）の夏でした。なんとか函館の地にも慣れてきて、また幾人かの知人もできていたのでなんとなく寂しいような、残念なような気もしたのですが、周囲の事情から札幌に移る方がよいと判断した結果でした。

知人の宣教師が帰国することになって、あとに残される方々のお世話をさせていただくという重荷を持って札幌に移ったのです。ところが、その宣教師の送別会には割合に多く集まったのですが、いざ宣教師が帰国してしまうと一人も集まらなくなってしまいました。日曜日の礼拝は妻と二人だけという状態です。自分は主の導きで札幌に移ってきたはずなのに、これで本当によかったのだろうか。間違いではなかったのか。函館では四十名以上の信者たちもおり、福音を聞くために集まってくる方々もいたり、それなりに張り合いもあったのに、この札幌でたった二人だけで礼拝をしなければならいなんて……。

このような予想外の状況の中で、私と妻とはもう一度堅く心に決めました。「一粒の麦がも



札幌キリスト福音館

し地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」のみことばに基づいて「この札幌の地の一粒の麦」になろうということでした。昔から「死人に口無し」と言われるように、死人は口を開かない。文句を言ったり、権利を主張したり、自分の都合を要求したりなどはない。「もし死ねば、豊かな実を結びます」と主イエス様が約束しておられるのだから、やがての日の豊かな実りの時を期待して、死んだ者のつもりで自分自身のことを放棄していこうと決心したのでした。

その時から二十年の月日が過ぎた現在、会堂も建ち、二百名ほどの信者が集まる札幌でも大きな教会に成長しました。毎日曜日の礼拝ごとに兄弟姉妹の姿を見ては、あの、二人

だけで礼拝をしていたつらかった当初のことが思い出されて、胸が熱くなります。あの当時、どうして今日のこの有様を予想できたでしょうか。会堂狭しといっぱいにあふれる会衆と、力いっぱい主をあがめる賛美の歌声は会堂の外にまで響くのです。

私共の教会堂は住宅地に建っていて「札幌キリスト福音館」と言っていますが、静かな所だけにあまり人通りがありません。ところが日曜日になると伝道集会に来る人や礼拝に来る信者たちで会堂付近は大にぎわいになるのです。だれ言うともなく、教会堂の前の通りは「福音館通り」などとも言われています。これからはさらにこの辺一帯が「福音館街」とでも呼ばれるような、クリスチャンたちが多く住んでいる地域として発展するようにと、大きなビジョンを抱きながらその実現を期待して祈っているのです。

ビジョンと言えば子供の頃、「お前は歩くこともできないし、学校にも行っていないのに夢だけは大きくて」と、父や母からよく言われたことを思い出します。ミツバチを飼って蜂蜜を売ってみたいとか、薬草を畑に植えて一もうけしたらどうかなど、まったくできもしない夢物語のようなことを本気になって考えてカタログなどを取り寄せたものでした。

このような夢多き者に、神様はご自身のご栄光のビジョンを与えて下さいました。それが実現しつつあるのが札幌です。念願の三百人礼拝もそんなに遠いことではないと思っています。四百人収容できる会堂のためにも祈っていたのですが、現在の会堂に隣接する土地百坪を購入

できたことによって教会堂建設の見通しも立ち、夢が一步も二歩も前進しました。また、子供の教育のことがいろいろと取り沙汰されている中で、なんとか幼い子供たちに神のみことばに接する場を教会以外にも提供したいと願い、シャローム保育園を三年前に開設しました。

夢も期待もまだまだ続きます。大きなキャンプ場。クリスチャンのお年寄りのためのホーム。未婚の母の家など。神様が与えて下さる夢は、広くて大きくて果てしがないのです。

自分の体一つさえも自由にできないような者が、この北海道という大地で、計り知れない遠大な神のご計画に自らをぶっつけて生きられるとは、なんと痛快な人生ではないでしょうか。これこそ神が与えて下さった人生をエンジョイする最高のものだと思っているのです。

クリスチャンになる前の私は、朝目覚めると同時に「今日のこれからの一日を退屈しないでどう過ごそうか」と考えるのが深刻な課題でした。ところが今は、「今日のうちにこのベッドに戻れるだろうか」と朝目を覚ますとまず考えるのです。各種の集まり、手紙の整理、人との面接などで、以前には考えられないような、時間に追い立てられる毎日で、午前一時、二時に就寝するのもそんなに珍しいことでもなくなりました。

こんなにも毎日を精力的に時間を惜しんで生活していけることこそ、神が与えて下さった素晴らしい積極的人生です。

ハレルヤ結婚三十年

結婚二十五周年に、親戚の者や友人たちを札幌に招き、銀婚式を行おうと計画しました。女性にとつては、一生に一度、あの花嫁衣装を身につけることが大きな夢だろうと思うと、妻にもそれらしき衣装を着せてあげたいし、人々の前で祝福を受けさせてあげたいと思ったのです。しかし、当時の事情がそれをゆるさず、とうとう実現できませんでした。それでも、二人の息子たちが私共二人に内密にして企画してくれたパーティーが結婚記念日の当日わが家で開かれました。子供たちのこのような心遣いは、盛大に催される銀婚式以上に私共夫婦にとってどんなにか喜びであり慰めであつたことでしょう。

それから五年経った昭和六十年（一九八五年）四月十六日の結婚三十年の記念日。私共夫婦はニュージーランドとシンガポールでの伝道旅行を終えて一か月ぶりに帰宅しました。その日は別に、パーティーなどの大げさなこともせず、親しい身近な者たちと共に夕食のテーブルを囲んだのでした。それはこの世の華やかさではない、キリストにある者の持っている平和と、愛と、喜びの漂う一時でした。

結婚三十年。この期間を振り返ってみると、なんとまあ無茶なことをしたのかと思うこと

もあります。ずいぶん無謀なところもありました。多くの危機に直面し、神の素晴らしいみ助けの恵みにも浴してきました。まさにスリルと恵みとのはざまの三十年間だったような気がします。

このはざまの中で、欠点の多い私共二人を途中で分解することなく、しっかりと結びつけてきたものは何だったのでしょうか。

「愛は結びの帯として完全なものです」（コロサイ三・一四）。

二人が共に心から信じ頼ってきた主イエス・キリストからの愛が、私共二人に一体の夫婦としての絆を深めさせてくれたと今さらながら思うのです。

「あなた方はいつも一緒に、本当にうらやましいわ」と言われます。車でどこかに出かける時はもちろんのこと、日常のスーパーやデパートへの買い物から妻の歯医者行きまで一緒に。時間のむだを承知の上でPTAの会合や婦人のための集まりにも同行し、それが終わるまで車内で読書などして待っています。不便なようですが、どうせ家にいても落ち着きませんかそうしてきました。

私共は皆さんにこのように言っています。

「私共二人は結婚してから恋愛が始まったんですよ。いつも一緒にいないとお互いに落ち着かないんです。」本当にそうです。



ニュージーランドにて

こんな二人で、「彌次喜多道中」ならぬ国外と国内の伝道旅行をずいぶんしてきました。国内では、沖縄、九州、四国、本州、北海道の各地を大部分回りましたし、国外では、韓国の四回を始め、アメリカ、ドイツ、オランダ、スイス、ブラジル、ニュージーランド、シンガポール、ハワイ、カナダなど、自分の足で歩ける人でもできないような旅行をしてきました。

妻の背に負われての旅行だけに、いろいろなことに会います。東京の山手線の車中で、「こら！ 昼間から女の背にくっついてるやつがあるか」などと大勢の乗客のいる中で酔っ払いにからかわれたり、ハワイのホノルル空港では、黒人のポーターが私を背負っている妻に向かって「ユー・アー・ア・ス

トロング・レディー（あなたは力強い婦人だ）」と遠くの方から大声で叫んだりで、他の人ではちよつと経験できないようなことも味わってきました。背負われている私にとっても苦痛ですが、私を背負っている女性である妻はどんな心境だろうかと思うと、私の心はとても痛むのです。

けれどもこんなことばかりではありません。ある国の空港の待合室で、私を背負って立ち上がった妻の様子を見た一人の男性が、「メー・アイ・ヘルプ・ユー（手伝いましょうか）」と尋ねてくれたのです。見ず知らずの国で受ける親切なやさしい一言は、どんなにか私共の心を温めてくれたことでしょうか。

人間は機械ではありません。相手の立場を認め、理解しつつ語る一言が、どんなに人と人の関係を幸いにくれるものであろうかと教えられたのでした。

ブラジル訪問では、ことに日系人の皆さんからの熱烈な歓迎を受けました。「よく地球の裏側のブラジルまで奥さんにおんぶされて来てくれました。奥さんもご主人を背負ってよくここまで来られましたね」と、私と妻へのねぎらいのことばをかけてくれました。

韓国では、「ヨメさんがムコさんをおんぶして、日本の北海道からやって来た」と言って驚き、大歓迎をしてくれたものです。

非常に恥ずかしく、つらいこともありましたが、感激の場面もありました。普通ならばなか

なか味わうことのできないような事柄を私共夫婦は二人で一緒に体験できるという特権にあずかってきました。このような体験から、ますます自分たちは夫婦なんだという一体感を強くするのです。

昭和五十八年（一九八三年）の七月十二日から二十一日まで、オランダの首都アムステルダムで「世界伝道者会議」が開かれました。世界の百二十数か国から約五千人の伝道者たちが集まったのですが、私共夫婦もこの会議に参加しました。

会場を揺さぶるような会衆の大賛美の中に加わりながら、自分もこの世界の伝道者たちの中の一人なのだ、仲間なのだという実感に、胸の内に熱いものが込み上げてきたものです。この会議に参加するために、妻に背負われてとうとうアムステルダムにまで来たのかと、今さらながら神様のなさって下さることに驚きと感謝の思いでいっぱいになりました。

まったく歩けない者を世界のあちこちに出かけさせ、友人たちの中で一番あわれな者で、結婚の可能性などまったくなさそうな者に結婚の一番手としての道を開いて下さるなど、本当に神様は驚くべきお方です。このお方がこれからさらにどのようなことをなさるのかと、私共夫婦は大きな期待を抱いています。

結婚してからこの三十年間、神様の恵み深きことを共に味わいつつ、夫婦の交わりの中で「一番すぐれているのは愛です」という原則を学ばせていただきました。これは別に耳新しい

ことではありませんが、私共夫婦はこれからも学び続けなければなりません。この学びには終わりがありません。

妻は時々、「私はあなたを肉体的には背負っていても、精神的にはあなたにおんぶしているのです」と言います。そんな時、私は彼女にこう言うのです。「あなたが生まれてきたのは私のためだったのだから」と。

私共夫婦はお互いに相手が必要としています。これからも互いの必要を覚えながら生活していくでしょう。神様が私共を一体とさせて下さったことを感謝しながら……。

從順を学ぶ

三橋 幸子

時々、「三橋さんたちは本当に幸せそうね」と人々から言われますが、「そうです。私たちは本当に幸せです」と心から言えるのはなんと幸せなことでしょうか。

「心の貧しい者……悲しむ者……義に飢え渴いている者……義のために迫害されている者は幸いです」と主イエス様が山上の説教の中で感嘆された人たちはやがて真の幸福を約束された人たちでした。私もそのような貴重な体験をさせていただいたことを主に感謝しています。

「深い溝に落ちてごらんなさい。だれも見向きもしない深い溝に！　そこにこそわたしがあなたのそば近くにいます」と語られた主のお声に従っての結婚生活。そこには確かに貧しさ、飢え、悲しみ、だれもが顔をそむけるような深い溝がありました。

結婚式が終わって残ったお金は七百円。収入源のない私たちにとって、時には生うどんなしように油をかけて食べるとか、一日にトマト二、三個で過ごすというような、貧しさと飢えという厳しい経験が始まったのです。

「日ごとの糧を今日も与えて下さい」と涙ながらに真剣に祈ることを学ばされたものです。

お金の値打ち、神様に生かされていることの尊さを知らされたのもこの時でした。「パンを買い過ぎたので」と知人が持ってきて下さったり、一日看護婦のアルバイトを頼まれたり、また「祈っている時にお金を送るようにと主に示されました」と無記名でお金を送って下さった方もいました。

このように、生きて働かれる主のみ恵みによって私共は養われたのでした。牧者なる主は信じて頼る者、切に祈る者を緑の牧場に導かれ、乏しきことのない祝福の憩いに伴われたのです。

両手も自由に使えず、また立つことも歩くこともできない主人にとっては、結婚によって自由に出出ができることは大きな喜びであり、慰めでもありました。そのような主人を大きなリヤカーに乗せてあちこちと出かけたものです。

遠く田舎の方への伝道には、借りた男性用の自転車にリヤカーを結わえて出かけました。坂道や工事中の道では自転車のブレーキをかけても後ろのリヤカーの重さでハンドルを切りかねて川の中に落ちそうになったり、馬の首の下を横切ってヒヤッとしたことなどは恐ろしかった思い出として残っています。

また、店先の日よけの角に肩をぶっつけ、服もろとも肩まで傷つけ、「何をしているのか」とどなられて痛みも倍加し、畑の隅に行って声を出して泣いたこともありました。何もかも慣

れない初めての経験ととまどいと、人々からの好奇心と辱しめを一身に受けているかのような思いの中で、心の痛みは肉体の疲れや痛みよりも深く、私にとってはまさに悲しみの溝でした。そのような時にこそ主は近くにおられ、慰めと励ましを与えて下さいました。

「訓練されない者は訓練できない」と訓練を願って軽井沢にある聖書学院に入学したのは結婚一年目でした。現在は閉校となっていますが、当時この学院は日本で一番厳しいといわれたほどで、その訓練は想像以上のものでした。

「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ二・二〇）がモットーで、自己に死ぬことが強調され、勉強よりも体を通しての全き服従の訓練が強調されました。嫌いな人がいるなら、あえてその人と同室にさせられて愛することを学ばせられ、もし自分にとって不可能な仕事を与えられたとしても不平を言わずその仕事に対して忠実でなければなりません。私の仕事は鶏の世話でしたが、ある時、卵を産めなくなる病気がかかった鶏のために祈るように言われて祈ったことがありました。その結果、鶏は卵を産むようになり、主に頼る時主には不可能はないことを学ばせられたものです。

学院での日課は、朝五時四十五分の起床で始まり、朝の祈り会、午前中三時間の授業、午後の作業、夜二時間の自習時間、九時半が消灯でした。これらの校則にはどんな理由があろうとも従わなければ不従順の罪に問われるのです。

ある時こんなことがありました。明日までにモーセの五書を読み、それぞれの書のテーマを書き出してくるようにと院長から宿題を出されました。二時間の自習時間ではできるはずありません。だれ一人としてやってきた者はいませんでした。「やってきなさいと言ったことをどうしてやらなかったのですか。あなたたちは不従順です」と院長の怒りはたいへんなものでした。私たちはそんなできないことを要求されることに對して、反発の心にこそなれ、悪かったという反省の気持ちにはなれなかったのです。

しかし先輩が立ち上がり、「すみませんでした。赦して下さい」とわびたのです。私たちに弁解は許されませんでした。命じられたどんなことにも「はい」と従うことと、できなかったことに對してただ赦しを請うことの訓練でした。

入学して間もなく身ごもり、つわりがひどかったため一足早い夏休みをいただき帰省しました。しかし与えられた休暇を終えて再び学院に戻ってからの生徒としての生活は、私にとって以前にも増して厳しいものとなりました。

他の生徒たちが夏休みで帰省するために、幾人かでしていた仕事を私が一人で全部しなければならぬようになりました。夏のカンファレンスで使った何十枚かのシート、襟布等の洗濯、やぎ、うさぎ、鶏の世話、台所の仕事、畑の草むしり等でした。当時の主人の作で、「妻の身を案ずる我に術もなし、祈らんとせど涙のみ出づ」という歌が今では懐かしく思い出され

滑って転んだり、階段からも滑り落ちたこともあったので普通の丈夫な子が生まれたのが不思議なくらいです。

このような様々な出来事の中で、生徒として、妻として、母として、他の皆さんと歩調を合わせて学院生活を送ることは、私にとって厳しい訓練の時でした。

自転車とリヤカー

以前、主人は大きなリヤカーに乗り、人の手に引かれて教会に行っていました。しかし結婚してからは、郊外の村に伝道に行く時などリヤカーを押すだけで時間がかかってしまうため、外人の乗っている男性用の自転車を借り、そのうしろにリヤカーをつけて伝道に行きました。軽井沢に行った時も自転車とリヤカーを持っていきました。軽井沢は坂道が多く、あちこちと伝道に出かける時は、それはもうたいへんです。毎週日曜日には南軽井沢に伝道またはメッセージをするために行かなければなりません。朝作業を終え、ぬれた手に軍手をはめながら、礼拝に間に合うようにリヤカーを引いていくのです。

特に子供が生まれてからは、お乳を飲ませ、オムツを取り替え、寝かせながら行くのですからたいへんです。浅間山から吹きつける冬の風は強く、ハンドルをとられるため歩いていかな



長男恵理哉の誕生を記念して (1957年4月)

てくるのです。

私たちに与えられた部屋は、ガレージに付いているもので、ドアが三つもついている夏向きの四畳半でした。一月が出産予定でしたので、この部屋では寒くてたいへんですと助産婦に言われたのですが、代わりの部屋のあてもありません。助産婦に払うお金もなく、手伝う人も見つからず、この試練の中で主人は断食して祈ったのです。

主のあわれみは大きく、出産数時間前に隣の家の部屋が空き、手伝う人も与えられ、お金も満たされ、主ご自身がすべての準備を整えて下さった中で、私たちの長男恵理哉が誕生したのです。生まれ出た長男の体にはへその緒が七回も巻きついていて窒息寸前でした。主人を背負って雪道や凍った道を何度か

ければならないこともありました。手はほとんど感覚がなくなり、痛みが一週間ほど続いたものです。

行く時は雪が降っていないくても、帰りには身動きがとれないくらい積もってしまうことがあります。こんな中で「ああ、自動車があったら。いや、それまでいなくてもバイクさえあったら」と切実に願わされたものです。別荘地ですから、夏には豪華な車が行き交います。私たちがこのように自転車とリヤカーで走っているさまは、人の目に珍しく映っていたのではないかと思います。

つばの広いシャンな帽子をかぶったレディーたちが軽蔑するような横目で振り返り見ていく時は、ほんとうにわびしい気持ちになりました。けれども、「主よ、恵みたまえ。せめてバイクでも与えて下さい」という切なる訴えに神様は答えて下さり、ある時差出し人不明の小切手三万五千円というお金が与えられました。このお金で、念願のバイクを買うことができたのです。

衣類も備えられて

長男の「恵理哉」という名は、神によって育てられ、神のために働くようにとの願いから、

預言者エリヤにちなんで命名しました。恵理哉は確かに多くの人たちの祈りと愛のささげ物によって育てられたのです。

その中に、青森で私たちが日本語を教えた老夫婦がいました。この老夫婦は恵理哉のためにお孫さんの古い衣類をよく送って下さったのです。ほとんどの方は、お誕生祝いとして品物よりもお金を下さいました。三橋さんたちに必要なはまずお金だろうということで、服などはわずかだったのです。ですから恵理哉が毎日使う洋服、下着、オムツなどは、ほとんどその老夫婦が時になつたものを送って必要を満たして下さいました。恵理哉がどれだけ大きくなったかを実際に見たわけでもないのに、彼らは祈りの中で示され、その時に合った洋服を送って下さいました。このことによっても神様の素晴らしさを感じたものです。

恵理哉をささげる

恵理哉は、私たちが勉強している間、冬は一人で部屋に置かれ、雪が消え学院の庭に青い芝生の生えてきた頃には、体をロープで結わえられて木につながれていたものでした。

子供は何でも口に入れてなめるものですが、初めての子でもあることから、恵理哉が物をなめていても、あまり気にとめませんでした。授業を終えて一時間ごとに恵理哉を見にきて、芝

生でおとなしく遊んでいれば、安心してまた勉強に行つたものです。

ところが、離乳食期のある時から、恵理哉が食事をしたがらなくなりました。限られた時間で食事をさせなければなりませんから、時には、鼻をつまんで口を開かせ、食べ物を入れたほどでした。しかし、やがて「食べたくない」と泣き出すようになりました。どうしたことかと思ひ、医者に診てもらうと、よく幼児にありがちな舌に穴のあく驚口瘡^{がうそう}という、それは恐ろしい病気だったのです。おもちゃでも何でも、汚いものを口に入れてなめると、それについているばい菌が舌を冒し、穴のあく病気なのだそうです。それができていたために、何か食べるとしみて食べられないという感じでした。そのため、恵理哉は食欲がなくなり、だんだんやせていきました。

この恵理哉は私たちが勉強に行く時、「恵理哉、いい子でね」と言うと、いつも「バイバイ」とニコッと笑って後を追いません。また、伝道に行くため何時間か置いていく時も、「バイバイ、いい子にしててね、イエス様が一緒でしょ」と言うと、ニコッと笑って帰りを待っていたのです。

ところが、ある日曜日のことです。私たちは作業を終えて、日曜礼拝のために行かなければなりませんでした。いつものように「バイバイ」と言ってお出かけようとすると、どうしたことか表情がさえず、目を開こうとも泣こうともしないのです。私は、あわてました。抱き上げ

てみると、このままでは本当に死んでしまうのではないかと思えるほどぐったりしています。どうしようか、もう日曜礼拝のためにたくさんの人たちが集まってくる時間です。みんな主人の行くのを待っているのです。今のように電話で連絡するということが容易にできる時代ではありません。

主人もどうしたらいいだろうと、激しい葛藤に襲われているようです。普通ならば子供を抱えて救急病院にでも走らなければならない時に、私たちは「全能の神様、どうしたらよろしいのでしょうか」と神に助けを求めるほかありませんでした。すでに礼拝のために、人々は集まってくるでしょう。私たちは、これから自転車とリヤカーで四キロも行かなければならぬのです。まったく途方に暮れました。

やがて主人は決心したように「私たちの今なすべきことをしよう。主を覚える聖なる日として、多くの人々が集まってきているのだから、行かなければならない」と言いました。

それを聞いた私は、この子を置いていったならば死んでしまうのではないか、それでも主人に従っていかなければならないのかという思いが入り乱れ、心の中は葛藤を繰り返していました。

私は恵理哉が病気になれば心配ばかりし、死んだら気が狂うのではないかと言われるほど恵理哉に思いを捕らわれることが多く、この時もちょうどイサクをささげたアブラハムと同じよ

うな思いでした。

けれども、今は私が残って子を守る以上に、全能なる神のみ手にゆだねるということを学ばなければならぬのです。まず第一に主人と礼拝に行くことに従わなければなりませんでした。

泣く泣く着いた教会の礼拝で主人はアブラハムがイサクをささげたというあの有名なメッセージをしました。

「今、私たちも愛するわが子を神にゆだねてきました。このことを学ばされているのです。死ぬかもしれないような病気で泣くこともできないほど弱っている子を、今、神にゆだねて置いてきたのです。」

メッセージが終わり教会を出てから、どういうふうになりやカーを引っ張っていったのかわかりません。私の心は、ただ「恵理哉よ！」と叫んでいたのです。「親が心配してもどうすることもできません。全能なる神よ、いやして下さい！ 生かして返して下さい！」心の中で叫び祈りながら夢中でわが家に急ぎました。

玄関で私たちが帰った音を聞いたのでしよう。恵理哉が「ママッ」と大きな声で叫んだのです。泣くことも動くことも目を開いて「バイバイ」をすることもできなかったその子が、今や元気になってベビーサークルにつかまりながら「ママッ、パパッ」と叫んでいたのです。その

声を聞いた時、神様は祭壇にささげられたイサクの代わりに雄羊を備え、イサクを返されたように、私たちにも完全に驚口瘡の治った恵理哉を返して下さったということがわかりました。主に従う、ゆだねるということの厳しさを愛する子をささげるといふ切ない経験を通して教えられた事件です。

主人の誕生日

七月十四日は主人の誕生日です。日頃、学院の食卓には、主人の好物があまりなく、常々「ラーメンが食べたいなあ」と、もらしていたことから、誕生日にはラーメンを食べさせてあげたいと思い、街へ出かけていきました。

手もとには五百円しかありません。神様に祈るならば、必要をいつも満たして下さるという確信から、今日は主人の誕生日でもあるし、この五百円を使ってしまうのもいいだろうと思っただけです。

ラーメン好きの主人ですから、この日だけは主人に二杯食べさせ、私は一杯、恵理哉にも小さい丼を取り、楽しい外食でした。帰りには少し高いグレイプジュースを恵理哉のために買い、五百円をほとんど使ってしまったのです。

当時、私たちは三年間の訓練を終えて学院の職員となり、主人はある課目を教えていました。職員たちには学院側から、ある程度の生活費が与えられていたようです。しかし院長は、私たちに「月の初めの日曜献金をあげよう。その他は信仰によって歩みなさい。今までも主に頼って歩んできたように」と言いました。

日曜献金といっても、教会に集まってくる人々は貧しい学院生徒たちと職員が主で、あまり期待できるものではありませんでした。

私は鶏の世話をしていましたので、報酬として卵を一日三個頂けました。昼食は学院の皆さんとすることができましたが、朝晩の食事は自分たちでまかなうことになっていたのです。

七月十五日からの食費はありません。私はいつものように信じて祈りました。しかし、その時は、私が考えていたほど簡単には与えられなかったのです。もちろん真剣に祈りました。来る日も来る日も真剣に祈りました。涙ながらに祈れども祈れども空を打つようで、その答えは得られず、やがて十日が過ぎました。

神様が答えて下さらないからには、何か理由があるのだろう、それは私の側に神様との隔てをつくる罪があるからかもしれないと思い、あれやこれやと自分の思いを探り、少しでも思い当たることがあれば告白し、悔い改めました。しかし、それから二、三日経っても、何の返答もないのです。

十円のお金ありません。手紙を出すことすらできません。神様の真実について、私の心の中で二つの声が激しく戦い始めたのです。

「神様、あなた様は、すべてをご覧になられ、すべてをご存じであられるお方です。私たちの必要をご存じであられます。あなた様があわれみと恵みに富み、真実であられるということは、私たちの必要を満たして下さるお方だということではないのでしょうか。」

「あなたがそんなに心を込めて、涙を流して祈っても、神様はもうあなたには答えて下さらないのです。」

悪魔の声らしい不信仰のささやきが、私の心を捕らえようとしていたのです。

「いいえ、そんなことは決してありません。必ず答えて下さるのです。今までその折にかなって必要を満たして下さいました。」

「神様はもうあなたに対して不真実なのです。あなたを見捨てたのかもしれませんが。」

「いいえ、そんなことは絶対にありません。常に真実であられた神は決して変わることはありません。」

「でも、恵理哉を見てごらんないですか。おやつがないどころか、長いこと十分食べさせていないでしょう。池のパセリやセリだけではもう嫌と言っているでしょう。かわいそうではありませんか。」

「大人である私たちは、まあまあまだ我慢できるとしても、小さい子供にそうさせてよいのだろうか。」

私は小さな恵理哉のことを考えた時、たまらなく悲しくなり、激しい葛藤の中でもだえ、泣き崩れました。

しかし、はっと我に返り、「私たちは神のみ手の中に生き、動き、存在させられているのです。私たちのいのちを握っていらっしやるのは神様ですから、たとえ私たちが食べ物がなくて病気になるようなことがあるうが、死ぬことがあるうが、それが神様のなさっておられることであるならば、すべては良いことです。たとえ死んだとしても、天国へ迎えられるのですから、それは素晴らしいことです。すべてのことを感謝します。主のみ手にゆだねることを学びます」と心から主に感謝し、賛美し、勝利の祈りをささげることができたのです。

激しい葛藤から解放され、平安と喜びの中に、七月の最後の日を迎えました。長いトンネルをくぐり抜けたような気がしました。

八月を迎えました。その日の午前、私が外を歩いていると、ある姉妹に呼び止められました。走って近づいてきて、恐縮したように、「ごめんなさい。本当に申し訳ないことをしました。実は、七月十五日頃、三橋さんの奥さんに渡して下さいと、封筒を預かっていたのをすっかり忘れていたのです」と言って封筒を渡して下さったのです。中には四千円が入っていました。

ました。

私の心は躍り、神様のみわざがなされ始めたと思いました。封筒を握りしめながら、喜び勇んで家に帰りますと、玄関に大きなすいかがあり、お肉があり、恵理哉のおやつまでありました。だれが置いていったのかわかりません。

次の日には、ちょうど軽井沢に来ていた宣教師が「神様からのものです」と言ってお金の入った封筒を下さいました。

その他、数日のうちに、集会の講師謝礼として主人が数千円を頂いたり、無記名の郵便物の中にお金と同封してあったり、三万五千円の小切手が送られてきたりしたのです。

七月の後半の十五日間は実に長く感じられました。苦しみ、飢えさせられて、神の真実を信じ、まったくゆだねることを学ぶまで、神様の恵みはせき止められていたのです。

八月の幾日かの間に、それまで経験したことのないほどの多額の金額と肉、くだもの、野菜などを頂く恵みにあずかりました。

「それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。……あなたは、人がその子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを、知らなければならぬ」というみことばを通して主のみ旨が何であるかを教えられました。主は愛する者を懲らしめ、むちを加えられるのです。

初めての開拓伝道

函館で開拓伝道を始めた時、私たちの手もとには必要なお金がまったくありませんでした。本当にこれからが信仰の冒険のスタートです。

部屋代は宣教師が払って下さるという約束でしたが、それにしても彼らと私たちの生活には、非常な差がありました。彼らのためには、本国で祈る人、サポートする人がありました。が、私たちには祈り、バックアップしてくれる人はだれもいません。私は寂しさと葛藤を覚え、たものでした。宣教師のところには、本国から、よく手紙やいろいろな小包が送られてきて、それを見るたびにうらやましく思っていたのです。

その年のクリスマスのことです。ある朝、私たちにも何かいいプレゼントを送ってくれる人がいるといいのにと、主人と話していました。

日頃デパートで買い物をするのはほとんどなかったのですが、その朝主人は、「ママにブルーのカーディガンを買ってあげたいなあ」と言い出したのです。

私は、恵理哉には、おもちゃと洋服を買ってやりたい、主人には暖かな襟巻をと、家族で話

しながら朝の食事をしていました。主人は二階の窓から道路を見下ろし、その前を行き交う人を眺めているのが好きでした。いつものように外を眺めていると、家の前に郵便配達車の車が止まったのです。配達人は小包を持っていました。「大家さんに何か贈り物があるのね。」私も一緒に眺めました。私たちへの郵便物は、いつも勝手口の方から配達されていたので、その小包は大家さんの家へ届いたものだと思っていたのです。

主人と私は、買い物ができなくてもせめて今日はデパートでエレベーターに乗り、おもちゃ売り場を歩いて、恵理哉と楽しんできましょうかと話していたのです。

そんな会話をしているところへ「三橋さん、小包ですよ」と大家さんの声が聞こえました。大家さんのところへ来たと思っていたのは、わが家にきた小包だったのです。私はあわてて階段を降りてその小包を頂いてきました。差出し人はよく知らない宣教師の名前です。しかも、なんと素晴らしいことでしょう。その中に、今朝話していた主人の襟巻、恵理哉のおもちゃ、私のブルーのカーディガンが入っていたのです。

「わしのように、新しくなる」

「三橋さんを気づかって幸子の健康のことを口には出せなかったけれども、こんなに元気に

なつて本当によかった」と心から両親が喜んでくれたほど、一時期の私は最悪の健康状態になりました。私たち夫婦は、よく「あなた方は若くてお元気ですね」と人から言われます。そのたびにあの最悪の健康状態にあった函館時代に与えられた「あなたの若さは、わしのように、新しくなる」というみことばが響いてくるのです。主は実にその約束を真実になしとげて下さいました。

函館に移って一年余り過ぎた後に、私はそのままの生活を続けることができないほど、やせて、疲れて、また胃痛に悩まされていました。

軽井沢で、疲れ切った体にむちを打ちながら、育児、勉強、作業、伝道にと励んできた四年間は、いかに訓練の期間とはいえ、私には過労のようでした。その後、函館でのそれ以上の厳しい生活に私の体は耐えられませんでした。

二階住まいでのこの一年間、主人の用便、食事の支度、来客の応対等で、急な階段の上り降りを日に幾度したことでしょう。さらにバイクとリヤカーであちこちへ伝道に行ったことや栄養不足もあってか、心身共に非常に疲れ切っていました。

そんなある夜のこと、胃の激痛に襲われ、一晩中苦しみました。心配していたことが起こったのです。いつかこのようになるのではと、主人も私も予期していたのです。できるならば、主人が私を抱えて病院に走ったことですが、どうすることもできません。主人は



恵理哉の小学校入学記念 (1963年4月)

心の痛みを感じながら、これまでにない悲痛な思いをもって、涙ながらに祈りました。私起き上がれない様子を見て、死んでしまうのではないだろうかという思いにかられたのです。たとえそうでなくても、函館の伝道というビジョンに胸をふくらませ、情熱を燃やしていた矢先だけに、行き先が暗黒に閉ざされたような気持ちであったにちがひありません。

私が胃の激痛に襲われた日の早朝、祈っていた主人に、主は詩篇一〇三篇のみことばにより「あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる」という素晴らしい約

束を与えて下さったのです。

確かに開拓伝道をするには、新しい体力、満たされた霊が必要でした。神様から約束の恵みとあわれみの冠とを頂くには、私の弱り切った古い体は葬られるべきものでした。

胃の状態は、フィルム二枚つなぎ合わせてもまだ写し切れないほどひどい胃下垂で、その上胃潰瘍が広がっていて、すぐにでも手術しなければ治らないという医師の診断でした。

しかし全能なる神は、そのような体を、まったく別の方法で治して下さいたのです。主は、衰弱し切った私の体に新しい生命を宿らせ、体を生き返らせる方法を取られました。次男の妊娠によって私の体内の臓器が活発に働くようになり、それと同時に胎児によって胃下垂の胃が上げられ、私の体は新しく変えられていったのでした。

やがて次男の与志哉が生まれ、体力もつき、伝道に出かけられるほどにまで回復しました。この時を待っていた主人と共に、伝道旅行に出かけるようになりました。生後数か月の授乳期の次男を旅行中何日間も人に預けておくわけにもいかず、私は主人を背に、赤ん坊を小脇に抱え、片手に三人分の着替えとオムツを丸めたスツケースをさげるといふことに勇ましい格好でした。ある時など、駅まで見送ってくれた姉妹が、私たちの姿を見て、「汽車の乗り降りや、乗り換えの時の階段などはどうなさるのですか」と、心配して聞いて下さったものです。主が共にいて私を支えて下さることを信じ切っている私は、「主がその時にかなって良き助け

を与えて下さるでしょう」と答えました。こんな私の姿は珍しいことではありません。長男の時も、同じような格好で、上野の駅を小走りに時間に合わせて走ったものです。人が私にぶつかってきて、私の靴が階段の下までころげ落ちて、だれも拾ってくれなかった時は、人の冷たさを感じさせられ、寂しい気持ちになったこともありましたが。しかし、主は不思議なほど私に力を与え、その時になかった素晴らしい経験をさせて下さいました。

病気になって二階住まいが難しくなり、一階に住みたいと切に願うようになった時、主は私たちの思いにまさる素晴らしいことをなさして下さいました。住むだけではなく、集会もできる広く大きな家に導かれたのです。人々も多く集まってくるようになり、集会の人数も多くなってきました。

この函館時代は、特に学生伝道に力を注ぎました。当時の学生は、人生について真剣に考え、悩む者たちも多かっただけに、年間の主なプログラムとして学生の特別伝道集会が企画されたのです。

ある時は、大きなホールを借りて、学生の特別伝道集会が開かれ、五、六百人の高校生が集まりました。主人は、自分が学校に行かなかったせいもあり、学生が大好きで、彼らと共に語り合うことを楽しみにしていました。そんな主人にとって大勢の学生を対象にメッセージを語れたことは、伝道者として大きな感激だったことでしょう。このような特別伝道集会から定期

的な学生会へと発展し、若者たちが主人の周りに集まってきたのです。私の主な働きは日曜学校であり、情熱を燃やしていました。その時の生徒の中から、今、教会で責任ある兄弟の奥さんとなって活躍している姉妹たちもいます。

❧ 札幌へ

「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(ヨハネ一二・二四)。

伝道を始めて五年の歳月を迎えた函館の地に、初めはあまりなじめなくても住めば都で、愛着さえ覚える住み心地よさを感じるようになっていました。知り合う人々も多くなり、兄弟姉妹たちの交わりの親しみも深まってきましたし、伝道も軌道に乗り、その活動を深めていきたいと願っていました。

しかしその矢先に、札幌で伝道しておられた宣教師が帰国するに当たり、主人は残される信者、求道者のことが心にかかり、札幌へ行く重荷を感じたのです。

函館で共に働いていた宣教師とも別れて、私たち二人だけの伝道の場として、主は札幌の地

を選ばれていました。一粒の麦が多くの実を結ぶには、地に落ち、出た芽が踏まれ、寒い冬を越し、春には土をかけられて根株が分けられる、という多くの過程を通らなければなりません。そのように私たちも、まず自分自身にまったく死ぬことと、そのことがどれほど意義深いことをかを学ばなければなりませんでした。

函館から札幌に引っ越してきた年の冬は、これまでに経験したことのないほどの異常な積雪量で、毎日雪との格闘で明け暮れました。駐車場で雪ダルマのようにスッポリと雪に包まれた車の中から自分の車を探すのが一苦勞でした。家に帰る道々、シャベルで雪を取りのけ、道を作りながら車を走らせたものです。

玄関の戸が雪に押されたうえ凍りつき、どうしても開けられないので、小学校に行く息子をお便所の小さな窓から抱き上げて出してやったことさえあったのです。

車を運転して間もない私は、運転技術も未熟で、車に対する知識ありませんでした。雪国における冬の走行と車の管理の困難さは、それまでには予想もつかないことでした。

初めは小さな車でしたが、冬の危険に備え、中古の大きな車を買いました。最初の冬は、車の扱いに慣れていない者にとって、それはそれは大ごとでした。寒い日には決まってエンジンがかからず、バッテリーの上に電気コタツを置いて暖めたり、二つのバッテリーを使つて、折り折りセルモーターを回したりしましたが、スタートするまでには時間がかかったもの

んな中で、函館の姉妹たちから時折届く野菜やおやつ、お金などの賜り物は、今思い出しても涙が出るほどうれしいものでした。

ここでも函館同様、学生、特に大学生、予備校生たちが集まってきました。親元を離れて自炊しながら苦勞している者や、温かい家庭を慕っている者たちが、昼となく夜となく集まってきては、食事を共にしたり、泊まっていたりしたものです。けれども、同じアパートに住む人たちを氣遣って、賛美歌を歌うことや夜に兄弟姉妹たちや求道者たちと語り合う時は、特に注意しなければなりませんでした。そこで、もっと広くて自由に出入りできる家があればと、切実に願った結果、不思議なように、現在私たちが住んでいる部屋数の多い家が与えられたのでした。

この家から教会の基礎づくりが始まったと言ってよいでしょう。現在の教会で、長老、執事として主に仕えている六人のうち、三人もがこの家で寝食を共にした兄弟たちです。与えられたこの家も、主の栄光のためにと、私たちの住居のほかに、一室は集会のために、他は兄弟姉妹の住む部屋として使いました。私たちの生活は、ただ信仰によってのみ歩んでいましたので、同居する人たちにもそのことを学んでほしかったのです。

中には、貧しい学生もいれば、すでに給料をもらっている姉妹もいました。クリスチャン同士の共同生活ですから、自分のことばかり考えず、食費はその時々自分の信仰良心に従っ



恵理哉中学入学、与志哉小学校入学（1969年4月）

です。ようやく走っても、目的地に行くまでに滑って雪やぶに突っ込んだり、溝にはまったりで、時には午前の日曜礼拝に間に合わず、午後になったこともありました。

札幌では、宣教師の帰国後、ほとんど人が集まらなくなり、ゼロからの開拓伝道でした。配ったトラクトを読んで連絡を下さった方を訪ねたり、少しの手がかりを頼りにあちこちを訪問しているうちに、夕食が夜の十二時近くになることもありました。子供たちはおなかをすかせて待つのですが、その中で、自分たちも主にお仕えしているのだと、子供心にも学んだことと信じています。

札幌は函館に比べて物価が高く、子供のおやつどころか、「日ごとの糧を今日も与えて下さい」と切実に祈る日が続きました。そ

て、持っているものの中から箱の中に入れるという方法をとりました。この箱の中味によって食事の内容が決まるわけですが、何しろ食べ盛りの若者たちと息子たちでたいへんです。そのほかに家の維持費、伝道費用のための大きな資金が動きました。箱の中はその月によって違い、少ない時もある、私にとって大きな戦いの連続でしたが、主はその時にかなったくすしいみわざをなして下さいました。

夕食の仕度の時間になっても、買い物をするお金がなく、ただ祈るしかすべを知らない私に、現金書留が速達で配達されたり、ある時は郵便受けにお金の封筒が差し込まれていたり、その場の危機をしのいだ経験は、一、二度ではありません。一生の間、良いもので満たして下さると約束された主は、今も満ちあふれる良いものをもって祝福し続けておられます。

海外までも

「驚のように翼をかけて上ることが出来る。」このみことばのように、文明の利器である飛行機の翼で二十八時間余りの空の旅、地球の裏側であるブラジルまで飛んだのは一昨年（一九八三年）のことでした。

海外伝道に行きたい、海外にいる邦人に福音を伝えたいという、主人のかねてからの念願で

あったビジョンが具体的に実現されたのはこの札幌に移ってからのことです。韓国、アメリカ、ニュージーランド、ヨーロッパ、そしてついにブラジルまで飛んだのです。

牧会に、巡回伝道に、その他もろもろのことで、毎日追われる忙しい日々になってきました。限られた時間をいかに無駄なく使うかが今の私たちの課題です。年々私たちのスケジュールは過密となり、主人はその年のスケジュール表を私に見せて、「今年はどうのようにこの忙しさを切り抜けるだろうか」と言います。しかし次の年はさらに忙しくなるということを毎年のように繰り返してきました。

肢体のハンディーを持ちながらも、健常者と変わらないハードなスケジュールで動くのですから、当然、体が疲れ、内部の臓器にも負担がかかり、心臓、胃、腸の痛みを訴えるのです。その様子を見聞きするにつけ、最悪のことを考える私は、切実にいやされることを祈るのですが、主人がいやされた頃には、私が主人と同じような症状を起こし、その痛みを経験させられます。

私にとって、経済的な面のほかに、主人の健康のことが深刻な信仰の戦いでした。ある時などは、四週間ほど寝たきりとなり、主人の顔に顔をつけて呼吸に聞き入り、ある人からは葬式の準備をすべきでしようと言われるくらいいのちが危ぶまれたこともありました。けれども主の恵みの中にいやされて守られて、今日に至っています。

「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」のみことばこそ真実であり、慰めに満ちた励ましでした。

札幌の地に主人と共に一粒の麦として落ち、あれから二十年の歳月を迎えようとしている今日、二百余名の兄弟が主に連なり、実を結ぶに至っています。その姿を見るにつけ、主のなされたみわざをあがめ、み名に栄光を帰するのみです。今日まで無我夢中でお従いさせていたのだと思うものの、自らを省みる時、もっと忠実であつたならば、さらに豊かに実が結ばれたらうに思うのです。

子供たちも大きくなり、それぞれに自分の使命に向かって私たちのもとから巣立っていくようになりました。長男は今、ハワイで宣教活動に励んでおり、次男も大学を卒業し、婚約して、宣教を志し、その準備をしています。息子たち二人が幼い時に様々な困難を通されたにもかかわらず、親の歩んできた道を自分たちもまた歩むことが最高の道であると、献身するに至ってくれたことは、親としてこの上ない喜びであり、深く感謝するのみです。

「かすみを食べて生きていくのですな」「結婚とは名ばかりで子供も産めないでしょう」「小説みたいな結婚をして、そのうちに離婚するでしょう」という結婚当時の人々の予想をよそに、主は実に私たちの思うことよりもはるかに素晴らしいことをなして下さいました。

時々、「三橋さんたちでもこんな大きな家に住んでいるのですか」と言われたことがあります

す。新婚当時、主人の実家での六畳一間の生活、その後お借りした農家の屋根裏での生活。今では部屋数が十一もある大きな家が与えられ、兄弟たちにもその恵みを分け与えられる特権にあずかっています。「日」この糧を今日も与えて下さい」と深刻に祈り、食うや食わずで一円、十円のお金の尊さを経験した者が、今や満ち足りる豊かさの中で、他の人々をも潤させていたたく恵みにあずかっているのです。

「もうお孫さんがいらっしゃるのですか」「息子さんも同じ働きをいらっしゃるのですか」と、私たちに対して驚きと興味を持つ方々もおられます。主は、知恵ある者、また強い人を辱しめるために、愚かな、弱い、この世の取るに足りない者、見下されている者を、すなわち無きに等しい私たちをあえて選ばれたのです。主のみ名はほむべきかな、です。

札幌伝道二十周年を迎えて、数々の恵みとあわれみを思い出す中で、現在の会堂建設の時のことを忘れることができません。私たちの家の一室から始まった札幌での働きが、市の中央のビルや、地区の会館等を借りるほどにまで盛んになり、やがて自分たちの会堂を建てるために古い家つきの土地を購入することができました。

北海道の秋も深まってきた十一月三日に、兄弟たちの手でその家を取り壊し、二百名ほど入る会堂を十二月二十五日のクリスマスまでに完成させようということになりました。冬季期間には建築業者が手を引く季節でした。しかし建てたい一心が、不可能を可能となしたもう神への